

部活動(各部の変遷)

○50周年記念誌(昭和46年発行)・70周年記念誌(平成3年発行)掲載記事

○武儀高等女学校の部活動(50周年記念誌より)

今日でいう部活動に相当するものは、学校長が統轄する「校友会」(現在の生徒会に相当)活動の一部に位置づけられていた。

本校が保管している、5周年記念誌(大正15年12月発行)には、図書雑誌部・音楽部・講談部・庭球部・ピンポン部・一般遊戯部の記載がある。また、校誌第8号(昭和16年12月発行)には、バスケット部・バレー部・テニス部の他校との交流活動の様子が記載されている。しかし、これらも戦時下の中、昭和16年(1941)4月からの「学校報国団の結成」指示により校友会は解散、武儀高等女学校報国団に改組された。かつての部活動に相当するものは、この報告団の中の鍛錬部に「班」として位置づけられ、次のような班が活動を許された。

・排球班(バレーボール部)、籠球班(バスケットボール部)、庭球班(テニス部)、陸上競技班、卓球班、武道班(柔道部の発足)及び勤務作業班。これらのうち球技は、いずれも適正競技スポーツとみなされ昭和17年度より廃部を余儀なくされた。

各部活動のあゆみ(50・70周年記念誌より抜粋及び一部の加筆有り。)

<文化系>

・演劇部

武儀高女の校友会誌によれば、演劇部の発足は高女創立とほぼ同時期である。当時は講談部と称し、狂言なども上演するという巾広い活動をしていたようだ。

関高校になってからは昭和30年(1955)の第3回演劇コンクールで「月冴ゆ」の上演により活動が軌道に乗り、以後「春雷」「地鳴り」「祭り」「月食」「娘たち」「佐渡の安寿」「うその皮」「ぜにごけ」と、38年まで毎年コンクールに出演した。その後5年間廃部状態が続いたが、44年に同好会ができて復活、「高校数学Ⅰ」を上演した。翌年の45年には「授業」を上演し、コンクールでは地区大会を勝ち抜き、県大会への出場を果たした。57年度県コンクール大会では、努力賞を獲得することができた。

最近では、平成元年度「はだしのニワトリ」を演じて、地区大会優勝、県大会奨励賞の栄誉に浴することができた。女子部員だけという長い間のハンディにもめげず、これからも頑張って往きたいと思っている。

・化学部

昭和22年(1947)に科学部が創設された。24年、学区制実施・男女共学に伴って発展的に物理部と化学部に分離、独立してそれぞれの歴史を作り出したのである。物理部は38年度をもって廃部となっている。化学部に独立した当時は、CA(クラブアッセンブリーという週1時限の授業)の時間など、1クラス分もある部員が集まり大盛況であったという。

部の先輩の中からは、すでに第一線級で活躍の学研の徒や、理科教育に携わっている教師

も多く生まれている。40年の岐阜国体時の炬火採取には、わが部自慢の太陽炉が一役買ったことも思い出されることである。最近では部として、淡色反応の研究や植物色素の色と液性等の研究に取り組んでいる。

(化学部は平成22年度より、その後できた天文部、生物部などと統合され、自然科学部となった。現在は自然科学部の化学班として活動している。)

・家庭科クラブ

昭和23年(1948)、武儀高女から高校になった年よりクラブ(部)として誕生した。高女時代に正科としてあった和裁・洋裁・手芸・料理といったものがそのまま移行するのは容易であったと思われる。

その後、十数年間は先述の4つの部に分かれていたが、39年に和裁部・手芸部に分かれ、翌年には手芸部に統一となる。さらに41年に今日の家庭科部に統合されてきた。以来、手芸・料理・洋裁と楽しい部活を続けてきている。57年以降の主な活動内容を拾ってみると、次のようである。

57年 エプロン・クッション・革細工・ペーパーフラワー・弁当作り他

58年 ろうけつ染め・調理実習他

59年 くつ下カバー・藤のカゴや風鈴・ソーpbasケット・マスコット・菓子づくり他

61年 アートフラワー・アンデルセン・編み物・小物づくり・菓子づくり他

以後もこのような活動内容は、基本的に今日に引き継がれている。

(家庭部は平成6年度をもって廃部となった。)

・ギター、マンドリン部

ここ数年来、高校生の中で音楽への関心は、ギターの普及と共に高まっている。本校においても文化祭での有志生徒による出演は、フォークソングを中心に展開されており、この風潮の中で昭和40年(1965)にギター部として発足している。当初は、マンドリンも含めての活動計画であったが、現在はギターを中心としてクラシックの演奏を行っており、校外における発表会は、43年からブラスバンド部主催の演奏会に賛助出演として参加している。現在のところこれが唯一の演奏発表である。

49年から名称がギター部からギターマンドリン部に変更になった。51年度をもって廃部となっている。

・グラウンド印刷部

昭和29年(1954)、男子数名にて発足した。当時は印刷技術が未熟のため技術習得に苦心し、市内あるいは郡上八幡の印刷業者の指導を受けたりしたが、学校祭、農芸祭などのポスター印刷のほか、外部の依頼を受ける程度にまで上達したようである。その後は部の性格にもよるが、地道な活動を続けている。

近年は、教室、職員室にはり出されるカレンダーづくりが定着し、多くの生徒、教師からも期待が寄せられている。

(平成22年(2010)からは美術部とグランド印刷部が統合されアート部となった。現在はアート部の中のグランド印刷部として活動が続けている。)

・コーラス部

コーラス部の発足状況は定かではないが、同好会的存在として、ごく内輪に活動し続けた。本格的な合唱活動は、昭和39年(1964)に混声合唱としての形態を定着させた頃に始まる。以後、年一回の定期演奏会を主軸に、NHKコンクールや朝日コンクールへの出場、それに加えて県連合音楽会、文化祭への出演など多方面にわたって活動してきた。46年までに、県代表として二度の中部大会への出場を果たした。

以後、今日までの主な成績は次のようである。

昭和48年 朝日コンクール県大会 1位 中部大会出場
58年 全日本合唱コンクール県大会 2位 中部大会出場
NHKコンクール県大会 銅賞
61年 NHKコンクール県大会 3位
62年 全日本合唱コンクール県大会 金賞 中部大会出場
63年 全日本合唱コンクール県大会 銀賞
平成 1年 全日本合唱コンクール県大会 銀賞
2年 全日本合唱コンクール県大会 金賞 中部大会出場
ぎふヴォーカルアンサンブルコンテスト 銀賞

以上の他、校内文化祭参加はいうまでもなく、関市文化祭や県連合音楽会にも例年積極的に参加してきている。今後は活動内容の幅も広げていきたい。

・茶華道部

茶華道部の起源は、高女の大正14年(1925)にまでさかのぼる。この年、茶道と華道が随意科目として発足したのを受けて、畳敷きの裁縫室で華道を、作法室と茶室で茶道の稽古が行われた。昭和8年頃から3年生と4年生については茶道と華道が授業の正科目となった。第二次世界大戦中の昭和19年から戦後の22年頃まで、金属の花器などの供出などもあり、用具不足で活動が一時中断を余儀なくされた。23年に、ようやく茶道部も華道部ともに復活。いらい、用具や活動できる部屋の確保に苦勞しながらも、少ない道具で細々と続けられた。27年校舎の移転により、部室も畳の部屋もなく、上敷きと道具をもって空いた教室などで机を片隅に寄せて稽古が続けられた。28年には男子30人が入部し活気を呈したが、その数は年々減少した。31年に茶道部、華道部ともに文化祭に初参加した。翌32年頃から42年頃にかけて部員は激増した。

42年以降は完成なった桜ヶ丘会館3階の和室で週一回活動している。

(創部以来、昭和42年まで茶華道部として活動。43年からそれぞれ茶道部、華道部として独立して活動する。平成22年から再度統合され、現在は茶華道部のなかの茶道、華道として活動している。)

・社会研究部

本部の発足は、関高校発足当時における思想界の自由な風潮の中で、社会科学研究部として出発。当初は思想研究等、社会全般への研究を行い、機関紙「市民」等を発行していた。その後、関市における郷土史研究熱の高まりを受けて、考古学研究調査を主とするように変わり、現在に至っている。

過去における主な研究調査は、次のようである。

昭和28年 塚原遺跡の発掘・調査に参加

31年 弥勒寺跡の発掘・調査に参加

34年 黒屋カマド塚遺跡の発見

36年 一之門遺跡の発掘・調査

37年 中池古窯跡発見

40年 千疋陽徳寺古墳群の発掘調査に参加

42年 古井住居跡の発掘調査に参加

43年 南野遺跡の発掘調査に参加

44年 富加稲荷山古墳の発掘調査に参加

45年 大杉廃寺跡の発掘調査に参加 等々

これらの活動には、本校社会科教員の他、南山大、名大の考古学教室や卒業生の吉田英敏氏(部OB)等の指導助言をうけた。その調査研究の成果は郷土研究に大いに貢献しており、『関市史』にも引用されているほどである。

近年は、少数部員ながらも、郷土史の研究に加え、時事問題、伝統、地域の地形研究にも意欲をもって取り組んでいる。

(社会研究部は平成22年度より地域研究部と名称を変更し、現在に至っている。)

・写真部

写真部は、昭和31年(1956)に同好の士が集まり発足した。当初は、活動する部屋にも事欠き、予算も不十分で苦労が絶えなかった。33年、理科教室竣工に伴って暗室が設けられてから、本格的な活動期に入った。文化祭の他、4月下旬に単独展示会も開いて活発な活動をみせたのは、30年代から40年代であった。皮肉なことに、高度経済成長期とカメラの普及につれて写真部員が減少し、今日ではわずかな部員で伝統を絶やすまいと、ふんばっているのが実状である。校内文化祭や県総合文化祭にも作品を出して頑張っている。

(写真部は平成8年度まで続いたが平成9年度より廃部となった。)

・珠算同好会（部）

かつて本校も、高校としての発足当初は、就職希望者が半数以上を占め、就職コースでは商業科目の履修もできるようになっていた。そのころから珠算部は活動していたが、大学進学希望者の増大傾向のなかで、昭和49年度を以て廃部となった。しかし、同好の士が集まり、平成元年度から珠算同好会が結成され活動を再開した。週3回の活動日を置いて、各自の技術上達を図っている。内容は、個人練習が主だが、全員での読み上げ算、読み上げ暗算も行い、検定試験に対しては、試験用のプリントも多くそろえ活用している。

（珠算同好会は平成4年度まで続いたが平成5年度より廃部となった。）

・書道部

大正10年4月、開校当初より、良き指導者を得て活動している。古い校友会誌を見ると夏冬の休みを利用して習字の好きな生徒を集めて練習し、時には台湾へ、また、大東書道展に出品して賞を得ている記事がある。校内展覧会は年2回行われていた。第二次世界大戦の前後は各種展覧会に出品することは不可能であった。終戦後、関高時代に入ってから書道部として本格的な活動が始まり、各種展覧会に出品、多くの業績を残している。

・新聞部

新聞部は、新制高校としての関高の発足とともに活動を始めた部であり、「関高校新聞」を発行しつづけて、今や第152号に達してきている。最盛期の昭和30年代には、ブランケット版4ページのものを年4回発行していたようであるが、残念ながら部室に保管している既発行分のファイルには欠けているものが多い。

現在は、3回発行を少数部員の頑張りで維持しているといったところである。なお、毎号好評を博している「こんにちは」や、「桜ヶ丘」の囲み記事は、30年以上の伝統をもっているものと聞いている。

（新聞部は平成6年度まで続いたが、平成7年度より廃部となっている。関高校新聞の発行は生徒会に新聞委員会が組織され、委員会組織の中での活動となった。現在も年2回を基本として発行しつづけられている。）

・生物部

昭和25年頃までは旧武儀高女の校舎で授業が行われていて、クラブも科学部として、ほとんど女子の部員であった。昭和26年から27年にかけて桜ヶ丘に移転したが、実験室もなく活動は不活発であったが、熱心な顧問の指導により、一生徒による400余点の昆虫標本が完成されている。その後、29年には男子生徒も増加し、動植物の採集や菌類の研究に活動は活発化してきた。昭和40年頃からは、植物に続いて動物の標本作りを主体に活動が進められてきた。

現在は、プランクトン、植物組織、菌類、クモの調査とともに、夏休みにはシダ植物の採

集をかねて、石徹白での野外実習を予定している。

(平成22年度に生物部、化学部、天文部が統合され自然科学部となった。現在は自然科学部の中の生物部という位置づけで活動している。)

・天文部

昭和43年(1968)、「天文同好会」として発足。44年に天文部に昇格。比較的歴史の浅い部であるが、皆既日食の観測、太陽黒点観測、しし座流星群観測など地道な活動を続けてきた。

62年3月に機関誌『銀河』が創刊されて以来、年間の研究成果をまとめて第5号までが発行された。創刊号をひもとけば、次のような壮々たる観測、研究レポートが60ページに満載されている。

・惑星の観測 ・星野と星雲、星団 ・流星観測の結果報告 ・ハレー彗星の観測

・月食 ・太陽黒点の観測結果 ・1987年は何といても「金環食」他

また、平成3年3月発行の最近号では、

・流星観測 ・星座 ・Have you ever seen the meteor? ・観測の四季

他が掲載されている。なお、平成元年度には、第33回岐阜県児童生徒科学作品展で最優秀賞を受賞した。

(平成22年度に生物部、化学部、天文部が統合され自然科学部となった。現在は自然科学部の中の天文部という位置づけで活動している。)

・美術部

関高校の発足とともに美術部の活動も始まった。文化祭への作品発表中心の活動が行われてきたようである。アトリエとしての美術室だけでは作業人数に限りがあり、まとまった活動ができず個人個人の活動になりがちであった。近年になって、外部展覧会へも積極的に作品応募して部活動への刺激を豊かにし、次のような成果を収めてきている。

昭和53年 県美術展入選 3名 原、後藤、粥川

59年 全国高校総合文化祭選抜 波多野 篤

県美術展入選 3名 波多野 篤、井上奈美子、伊藤淳子

63年 県美術展入選 2名 松山 恵 尾関立子

平成 1年 県美術展入選 1名 佐々木幸子

平成 2年 県美術展入選 1名 西部かおり

平成 3年 岐阜県展 デザインの部 入選 山口秀子

(平成22年(2010)からは美術部とグランド印刷部が統合されアート部となった。現在はアート部の中の美術部として活動をしている。)

・文芸部

文芸部は、戦後の学制改革に伴う併中時代を胎動期として、昭和24年(1949)の男女共学制実施とともに、本格的な活動を開始した。当初は、新聞部、演劇部と雑居状態で、時に応じて、同好の士がそれぞれの部門での活動に参加しており、やがて、新聞部、演劇部ともに独立した部へと移行したようであるが、その時期は明らかではない。活動の中心は文芸誌「雑草」の発行にあり、学校祭での詩や研究の発表、展示など多岐にわたっている。とくに「雑草」の第1号は24年7月1日付けで発行されているが、それ以来年一回の定期発行を継続しており、加えて59年度からは手作りの雑誌『ペパー・ミント』を、さらに62年度から『ローズカレード』(ワープロ誌)発行も続けてきている。

こうした活動の中で、63年度には、浅野嗣司君が全国高校生文芸コンクール小説部門で入賞、同部誌部門で『雑草』が優良賞を獲得するなど、輝かしい成果を上げている。さらに、平成元年度には、波多野太君が全国文芸コンクール詩部門で入選し、文芸部に新たな伝統を作っている。

(その他詳細な入賞成績は、部活動年度別成績一覧参照。機関誌『雑草』は本年度で第77号となる。)

・放送部

放送部は、昭和39年(1964)に部として発足した。58年には、岐阜放送コンクールに参加して、新人大会入選を果たしている。日常的には、昼休みの放送をはじめとして、学校行事の放送関係の諸準備や放送機器の操作、ラジオ番組の制作活動を行っている。夏には、全国高等学校放送コンクールのラジオ、CM部門にも参加している。また秋の県新人コンテストの朗読、アナウンス部門には、昨年度も3人が参加したが、あと一歩という所で入賞を逃した。今後はさらに研究努力をかさね、他校に誇れる放送部となれるよう頑張りたい。

(放送部は近年多くの大会やコンクールで入賞を重ねている。詳細な成績は、部活動年度別成績一覧参照。)

・無線部

昭和42年(1967)2月に無線部は始まり、同時にクラブ局の免許の申請を行った。7月にはJ A 2 Y J Vの免許も得た。受信機、送信機、アンテナを生徒会部活動予算で購入してそろえ、今日の活動基盤を整えてきた。

最近、恒例化した文化祭での展示、公開運用のほか、国内、国外のアマチュア無線局1100局との交信及び交信証の交換に取り組んでいる。

一般的に、無線というのは、例えば昭和基地の人とも話したり、地球の裏側の人とも話したりできるという、スケールの大きなものである。多くの人々の、より大きな関心を期待しているところである。

(無線部は平成8年度まで続いたが、平成9年度より廃部となった。)

・ユネスコ部

ユネスコ部は、今日残念ながら廃部となっている。昭和51年(1976)まで続いた部である。

ユネスコ部誕生を卒業アルバムに見ると、昭和30年(1955)ころ形を整えたものと思われる。「平和の砦」ユネスコの精神に従って、国際的な社会問題研究や養護施設訪問、関市への来訪外人との懇談会に参加してきている。その後、同世代外人との交友を求めての海外文通や英会話等、活動は多岐に及んでいった。

40年代に入って、英語学習と社会活動を二本柱とし、毎年学校祭には英語劇を自らの手で作り上げて参加し、好評を博したものである。42年には、名古屋大学スピーチコンテストに部員の磯野君が上位入賞の荣誉に輝いた。「国際化」がさけばれている今、復活が望まれる部の一つではなかろうか。

・パソコン部

昭和61年(1986)から部に昇格した若い部である。

日常的には、プログラムの制作、ハードの制作、コンテストへの応募や文化祭への出展等の活動をおこなっている。なお、昨年度文化祭には、「パソコンによる自動演奏(シンセサイザーの制御)と姓名判断(占い)」をもって参加したところである。

(パソコン部は平成21年度まで続いたが、平成22年度より廃部となった。)

・剣道部

昭和20年(1945)、敗戦と同時に剣道は他の武道と同じく全国的に廃止された。本校の剣道部が誕生したのは29年のことである。最初の顧問の日比野修一先生、その後の坂田實先生を中心とした指導の下、次のような成果を上げてきている。33年度県新人大会男子団体優勝、40年、41年には女子個人で佐藤弘子、丹羽幸子がインハイ予選でそれぞれ2位となり全国大会に出場。41年男子団体が東海大会初出場。44年男子個人で平岡直樹が優勝しインターハイ出場。46年春季大会女子団体優勝。47年には男子団体がインハイ県予選初優勝、念願のインターハイ出場を果たした。48年には女子が団体で同じく優勝、これも念願の団体でのインターハイ出場を果たすとともに東海大会では3位に入賞した。49年には三島孝子選手がインターハイ女子個人に、また高校生ながら全日本選手権に出場。50年には女子団体が再び優勝しインターハイに出場、翌51年には男子個人で石丸修が2位となりインターハイに出場するなど、その後も多くの選手が団体、個人で活躍している。

女子団体は昭和58年から61年まで4年連続で東海大会に出場し、3回のベスト4入賞の成績を残している。その間59年には女子個人で永瀬幸が優勝、60年には妹の永瀬由香が優勝、今井秀美が2位となり、ともにインターハイの出場を果たした。男子は平成2年の新人戦で団体優勝するなど、私立の強豪校などが台頭する中、公立の進学校として文武両道を目指し良く健闘している。

(その他詳細な成績は、部活動年度別成績一覧参照)

・サッカー部

昭和25年(1950)創立。本格的な活動に取り組みだしたのは、ほんの5～6年前、他校へ部員が出かけて行って基本技術を学んでからである。以来グラウンドで血の出るような厳しい練習を重ねに重ねて、現在のサッカー部が築かれたといえる。われわれサッカー部の特徴は、部員自身の手で活動を推し進める自主性あるクラブである。41年の県新人大会では準優勝を飾っている。平成2年、全国大会県予選で3位入賞を果たした。それに少しでも近づけるように毎日練習時間を有効に使い、「勝つサッカー」「楽しいサッカー」を目指して練習している。

・柔道部

昭和25年(1950)4月、鈴木輝雄先生の指導の下に柔道同好会が結成され、関警察署道場で練習を開始、翌年2月には2年2組の普通教室に畳を敷いて練習を行った。28年5月には、農業科倉庫を借用、29年には鈴木道場、30年にようやく体育館の一隅を使って懸命に練習に励んだ。こうした練習の成果によって、31年には県学年別大会に優勝、32年には、ついに県大会を制して全国大会に初出場を勝ちとるまでになった。その後、5年連続全国大会出場、38年度から46年に至るまで連続9回(通算14回)全国大会出場を果たしてきた。

40年、待望の武道館が出来たことは、われわれの部活動に一層の励ましとなった。40年の岐阜国体では、岐阜県選手団の旗手を務めた先輩の兼松興一選手(第11回卒)と狩野聰選手(第17回卒)が一般の部に出場。高校の部には、上野・古田・篠田・坂田・横山の5選手が県代表として出場し活躍した。46年は、県新人大会優勝(通算12回)、春季大会4連勝(通算12回)、全国大会県予選9連勝(通算14回)を成し遂げた。なお、全国大会9年連続出場は、全国でも天理高校の20年連続に続く2位の記録である。

47年以降も各種大会で活躍している。特にインターハイへの出場は38年から49年まで連続12回と、53年(通算18回)に出場した。東海大会においても毎年優秀な成績を上げている。県新人大会、春季大会、県総体、各種団体対抗柔道大会でも優勝を続け、県内の優勝旗はすべて関高に飾られていた。33年からOBを含め何名かの国体選手を送り出した。個人戦においても32年大会から49年まで18年間連続、そして53年、56年と数多くの選手が全国大会に出場している。

中でも特筆すべきは全国大会における草壁俊二選手(43年、中量級2位)、松井勲選手(49年、重量級2位)の活躍である。また松井選手は49年全日本選手権に高校生として初めて出場した。一般成年でさえ東海地区予選を突破することは至難なことである。

昭和38年には関高校柔道部OB会が結成された。新海武雄会長(第4回卒)のもと会員数300余名で運営され、物心両面にわたり援助を受けている。

(その他詳細な成績は、部活動年度別成績一覧参照)

・水泳部

本校にプールが完成した翌年、昭和38年(1963)に水泳部は同好会として発足、時あたかも北野寿彦先生の本校着任を迎えた翌年、39年に部に昇格、活発な活動を始めた。昭和40年の県総体で女子が総合優勝。八木ゆき子選手の岐阜国体出場を筆頭に、その後も目覚ましい活躍を続けている。

(その他詳細な成績は、部活動年度別成績一覧参照)

・体操部

体操部は、昭和24年(1949)、学区制の実施により編入されてきた武義中体操部のメンバーを中心に発足した。当初は、器具も少なかったが、自分たちで工夫して造ったりまでして、器具の種類を多くしていった。36年、男子が県大会器械の部において始めて団体2位を獲得して、東海大会に出場した。42年には、坂井寛司選手がクライミングロープで県1位、全国大会に出場し7位となった。45年には女子が種目別大会の平均台で3位、5位、6位に入賞した。63年度より女子は新体操に切り替え、しばらくの間女子は新体操、男子は器械体操の体操部として活動していたが、男子の器械体操は平成4年度をもって終了し、翌年の平成5年度(1993)からは女子のみによる新体操部として活動を続けている。

新体操に切り替えた女子はビデオ等を使って自力での研究、努力が実りつつある。わずか1分30秒間の演技を行うために、体力、柔軟性、舞踊センス、種具の扱いなど、毎日のコツコツとした努力が厳しく求められる。また、団体演技では、視線や指先まで呼吸が合うことを要求されるので、心の一体化も大切である。それが実ったときの感動の大きさを追いかけて、練習に励んでいる。

(その他詳細な成績は、部活動年度別成績一覧参照)

・卓球部

卓球部の前身は古く、大正13年(1924)のピンポン部創設に始まる。昭和14年(1939)、日本卓球協会ができていらい、卓球部の名が使われるようになったようである。しかし17年から20年の間は、「適性スポーツ」とみなされて廃部に追い込まれた。いずれにしても創設当時は軟式(日本独自のやわらかくて軽い軟球を使用。小さな卓球台と高いネットで行われた。)で用具も粗末、ラケットは板だけのものを使っていた。

関高校になってからは30年に体育館が新設され、他の部とともに体育館の片隅で練習に励んだ。その年男子ダブルスで長谷部、藤吉組が見事優勝し、全国大会(札幌)に出場している。さらに40年の岐阜国体には、上村隆則選手が県代表の一人として活躍した。

46年以降では48年の間宮選手の県大会ベスト8が目立つ。男女とも最近は、地区大会の上位進出が精一杯の所である。団体、個人ともあと一歩という所での惜敗が多い。

今後は実戦形式を取り入れながら、基礎練習にも重点をおき、各自の弱点を克服して頑張りたい。

・テニス部

校史をひもとくと、武儀高女創設とともに庭球部の活躍が目につく。大正13年(1924)10月には、東海高女庭球連盟主催大会に2年生のチームが初出場を飾っている。翌14年には第3位に進出している。岐阜県高等女学校庭球連盟が発足した15年の第1回大会には、参加校11校の中で見ごとな優勝をなし遂げた。優勝チームは東海大会初出場以来の、天池・桜井組であった。その後、昭和3年(1928)には三品・西田組が準優勝。県体育連盟への組織改革がなされた下での庭球大会になってからもよく奮闘し、6年には第3位、8年には第4位、13年にはついにリーグ戦で完全優勝に輝いている。

「ラケットの動きは早く梨地金の 春の日の中に 輝ける頬」とは、厳しい練習の中で8年頃の乙女なる部員が詠んだ歌である。

16年から始まる太平洋戦争中は、他の球技と同じく「適性スポーツ」として17年に学園から排除されてしまった。

星霜移り、戦後男女共学下の関高時代に入って、33年県総体で男女優勝を遂げた。団体戦1位校が出場できる全国大会(インターハイ)には、36年から38年の3年連続出場を果たし、戦後の黄金時代を築いた。この間、県総体・全国総体予選・東海大会にも輝かしい成績を収めている。ことに、39年には、全国高体連創設15周年記念に、女子チームが特別表彰を受けている。

その後の現状はきびしく、大学進学希望者の増大とともに部員確保に懸命であり、かつての栄光の庭球部史に宿すかげりの時代の到来を嘆かざるを得ない。

軟式から硬式に変わって徐々に力をつけてきた3年目、平成3年(1991)のインターハイ県予選で佐藤宏樹選手が5位に入賞し、東海大会への出場を果たした。国体予選でも3位に入賞した。今後もより好成績を目指して頑張りたい。

(庭球部は令和元年度より軟式から硬式に順次移行した。)

(その他詳細な成績は、部活動年度別成績一覧参照)

・バスケットボール部

武儀高女時代に発足したわが部ではあるが、長い間、土や石と闘いながらコート造りが主であったため、自分たちの力を十分に発揮するまでには至り得なかった。昭和40年(1965)には待望の室内コートが体育館内に実現、他の部活と共同使用ながらも、42年以降体育館使用計画に従って複雑な練習も行えるようになり、スピーディな動きも身について、44年には男子が地区1年生大会で優勝、46年IH地区予選優勝と成長してきた。県大会に通ずる力をつけることが今後の課題である。

56年の県総体で男子は準々決勝まで進出した。

平成3年度の「生徒会この一年」には以下のように記述されている。

男子部

今年も、チーム一丸となって、相手より速く、より動くように目標を定めてきた。まだ大会では、詰めの甘さのために後一步で惜敗しているので、これを課題に一層練習に励みたい。

女子部

スピードと切り替えの速さに重点を置いて頑張ってきた。ここ一つという時の粘りや精神力に欠けて、なかなか勝ち進めていないが、更に、正確さと持ち前の元気の良さで頑張っていきたいと思う

・バレーボール部

本部の歴史は、昭和2年(1927)の「学校体育要目」改正により、当時排球と称していたバレーボールが、必修科目に指定されたことに始まる。3年には、県高女大会に初出場。以後各種大会に出場した。とくに、終戦直後の22年には、県代表として金沢国体に出場を果たし、「素足で健闘、武儀高女」の見出しで新聞紙上をにぎわしたほどである。

47年度以降の主な成果としては、男子が県大会準々決勝進出を、47、53、54年度に果たしているが、最近は地区大会止まりである。部員は連日練習に励んでいるが、県大会出場を目標に一層頑張っていきたいものである。平成3年(1991)春季大会ではBブロック1位まで進出できた。さらに、平成7年度・平成8年度には県新人大会や高校選抜県予選大会などで男子が第3位に入賞し、東海大会への出場も果たしている。

・PTC部

PTCとは、Physical Training Clubであり、体力を作ろうということで、昭和42年度(1967)からスタートした。ランニング、ウエイト・トレーニング、エキスパンダーなどを使っての練習に励んでいる。

平成3年度(1991)をもって廃部となった。

・野球部

野球部は、昭和24年(1949)、男女共学となり旧武義中学校などから編入してきた男子生徒がチームを結成したのに始まる。27年、現在のグラウンド野球場に移り、本格的な練習を始めた。甲子園を目指す県予選大会では、32年、37年、38年と3回にわたり準決勝へ進出したが、あと一步で当時行われていた三岐大会への出場を果たせず涙をのんだ。

51年夏には2回戦で優勝候補の県岐阜商と対戦し、大方の予想を覆し5-4で勝利した。残念ながら3回戦で海津高校に惜敗したが、その健闘は地元を大いに沸かせた。

此処の所目立った成績は残せていないが、毎年、夏の厳しい暑さ、冬の厳しい寒さの中で甲子園を目指し、地道な努力を続けている。いつかその努力が花開くよう、さらなる飛躍に

期待したい。

・ラグビー部

ラグビー部は昭和51年(1976)に創部された若々しい部である。しかし、52年度には、県大会で準決勝に進出、56年度にも全国総体県予選ベスト8に進出した。昨年度も全国大会県予選ではベスト8となりよく頑張っている。

われわれラグビー部では「考えるラグビー」をモットーとし、県大会ベスト4をめざして毎日練習にとり組んでいる。少ない練習時間を、部員各自の自覚と集中力でカバーし、他の強豪高校とのハンディを克服しようと努力している。近年は3年生も最後の大会まで出るようになり、年々部のレベルも上がりつつあるので、目標達成の日も近いことを確信している。

・陸上部

本校で最も歴史の古いクラブの一つが陸上部であり、高女時代から活躍している。昭和9年(1934)に県下女子中等学校大会に出場し、17年には神宮大会県予選で総合3位に躍進、神宮大会出場を果たしている。同年9月には、県大会で堂々総合優勝して、全盛期を誇った。

戦後の高校時代に入っては、25年に森新一選手が短距離県代表で国体に出場。32年には川村俊夫選手が県新人大会で走巾、三段跳優勝などの活躍を見せた。さらに36年から38年に陸上部は目ざましい活躍ぶりを見せた。36年に山田重夫選手が秋田国体に、37年には川村重夫選手が走巾でインターハイ、岡山国体に出場。特に国体では7m15cmで堂々全国優勝を果たし、本校唯一の全国優勝の栄誉をもたらした。

40年代に入っては、44年の森節子選手の東海大会出場以後、県大会の壁が破れないでいるが、46年夏の地区大会では9年ぶりの男子総合優勝をなしとげた。これを機に今後の飛躍を目指したい。

50年代に入ってから再び多くの県上位入賞者を輩出している。その入賞の記録は、平成を迎えてもコンスタントに続いている。

(その他詳細な成績は、部活動年度別成績一覧参照)